

九州方言状態の史的三段層分派について

藤 原 与 一

筆者はさきに、「日本語方言の分派とその系脈」の考を述べ、後にまた、これについての一文章をまとめた。

国語学会講演会 一九五二年二月

広大文学部紀要第三号 一九五三年二月

いずれも未熟なもので、今後の討究にまたなくてはならない。ここには、それにつながる一つのしごととして、九州方言状態の一解釈をこゝろみ、大方の御教正を仰ぎたいと思う。

一

九州の方言状態については、早く東条操先生によつて九州方言区劃が提唱され、後にまた、春日政治先生吉町義雄先生その他の方々によつて、これが的確に説明された。

ところで、その区劃相互の対立は、どのような内面的関係にあるのだろうか。区劃はいちおう平面的に認定される。この区劃は、どういう過程で発生し、発展してきたものであろうか。静の区劃を動態として見直す時、どのような解釈がほどこされよう

か。こゝに、区劃成形の動態論が立つてくる。筆者はこゝに、方言分派の成立過程の追証を目的とする。いわゆる区劃を、發生的に、方言分派と見、その分派相互の関係をたどつて、系脈論をこゝろみようとするのである。結局は、区劃論的解釈の構造論的なもり上げということになるかと思う。

二

九州の方言状態は、その南島との関連をも含めて考える時、国語の方言状態の中で、もつとも注目すべきものとされる。その方言分派の層脈は、どのような解釈を適當とするものにもせよ、要するに、国語史のどれほどかを反映する、大きなうねりと見られる。それがさらに中国四国と関連するありさまは、海をへだたした島相互間の現象であるだけに、言語分布の自然の理法を考えしめるものが多い。

まず、九州の現勢は、大体として、東がわと西がわの、およそ両半に分けて見るべき状況にある。吉町義雄先生の「九州語用言

活用分布相要領並補遺」(國語字第八輯)に見られる「形容詞カイ語尾地域別図」を参照せられたい。「イ地域」は、福岡県東半地方から宮崎県(西南部の小林都城地方をのぞく)にわたつており、いわゆる九州東がわをほゞおゝうている。なお、大隅地方でも、「カ」語尾のおこなわれる中に「イ」語尾のものがあり、その東岸例では、「サミ」(さむい)「イテ」(いたい)「ツンテ」(つめたい)「ゾツサラシー」(しまりがたい)などという。こゝでは、「ものすごい」を意味するものに「ワツゼー」「ワツサイ」「ワツザイカ」があり、「もつたいたい」を意味するものとしては、「テコネ」、「アツタラシー」「アツタラシカ」がある。大隅半島の方言状態と、薩摩半島の方言状態とは、等しくない。こゝは九州の両足のようなものであるが、この、まさに東西の両足が、こまかく見て、等しくないことが、部分的にはあるが、九州全体の東西二面性を、いくらか暗示しているように思う。大隅半島の敬語法にも、薩摩地方の状況にくらべて、いくらか簡單化しているところがありはしないか。たとえば「オサイヂヤツタモンセ」(いらしてくださいませ)にしても、大隅でのおこなわれかたの方が、いくらかよわくはないだろうか。「:タモンセ」に対する「タモス」の言いかたは、薩摩と大隅とでどうであろう。「レル・ラレル」尊敬助動詞による敬語法のおこなわれかたにしても、大隅半島では、薩摩方面にくらべて、よわい点があるのではないか。大隅内之浦では、その微弱な残存のしかたがみとめられた。薩摩と大隅とで、敬語法の生活も、どのようにかはちがうということが言えると思う。九州東がわの変化につれ

て、大隅地方も、しだいに、多少の変容を呈してきたかと思われる。

東半九州の「イ」語尾現象も、一度は全九州的であり得た「カ」語尾現象が、やがてまたうすれたものと解されるのではなからうか。東半九州につゞく中四国西部区域に、「ナカラニヤ」「ヨカリヤ」などの「カリ」活用形式のものがある。これと九州西半の「ヨカ」地域との間にある九州東半は、「ヨカ」形式に無縁の土地ではあるまい。現に、「イ」語尾地域中でも良カと無カとは稀に使用する所があり、「已然形が良カレバや少カリヤの様にするのが豊前を除く全九州に普通である」。(吉町先生、前掲論文)それが、「イ」語尾の地方となり、かつは「カ」語尾の地域にも、「カ」「イ」両方が見られるようになってきているのだろう。

九州東半のこうした変貌は、総じて、東隣、中四国との関係によるものと解される。じつさい、豊後地方の人でも、四国人のことばに似よるを感じ、長崎地方などのことばに大きな距離感を感じるといふことがある。部外のわれ／＼が九州に行つた場合にも、福岡県東部地方・大分県地方・宮崎県北部地方に立つて、肥前・肥後の地方を思い見る時は、そうとうの東西方言差を感じる。肥前の状態は筑後・筑前になだらかに連続し、肥前西辺の状況は、内部的な底流として、よく南肥後・薩摩(↓大隅)地方に通ずる。「カ」語尾領域の現状は、偶然のことではない。

してみれば、豊日(A)・肥筑(B)・薩隅(C)の三区域も、たゞに同一平面に同格にあい並ぶものとはされなれないことになるであろう。九州方言の發生的分派は、まずBC:Aの対立に見わけ

られる。BとCとの別は、右の対立の後の区分なのである。九州方言分派の動態論は、BをCと一系列にとりあげるところからはじめられると言つてもよい。

三

東半地方は、東半として積極的にとり立て得る性質のものではない。東半に通ずる特色としての大きいものを、数多くあげることとはできない。東半の北部に「行きンサル」(なざる)などのことばづかいを見得ても、日向に南下すると、「ナハル」(なざる)や「ナル」(なざる)がさかんである。日向の中部以南には「ヤル」助動詞の尊敬法を見得るが、北の地方にはこれがない。かとおもうと、「行つてみて」式の「て」の「チ」は、「チェ」となるのもあわせ考えれば、東半地方に広くおこなわれ、大隅地方にも「ヨンヂクレッシ」(「よんでくれてみる。’)などとおこなわれている。これは西半にも見いだされる。

東半地方は、明瞭に自立するような分区ではないはずだと思ふ。この地方は、中四国との交渉によつて、個々の事情ごとに、その事象この事象と、変容・推移をおこしているのである。生活文化全般の交渉のしかたによつて、とかく受身的に変貌をきたすことになつたので、ものの場合ごとに、響応のしかたを異にし、そのために、東半分は、区域としての動播を示すことになつたかと思ふ。B・Cの西半地方は、東方からの、中国四国經由の影響を受けることの遅い点で、いくらか共通するところから、残存性の共通色を示すことになつたか。それが北方から新風を吸

入するにつけ、しだいにB・Cの差別を生じてきたのであろう。東方影響の受容部位としては、九州東北部にはなれた九州北部が、九州東半の南方、中四国との関連の比較的淡くなる地方と、同格の地位に立つ。したがつて、九州西北部から九州東南部にかけては、方言脈としての一つの系統が見られることになるのではないか。「ナハル」ことばが、肥筑とともに日向にもさかんなものも、こゝに見てとられる。九州西北部から出はずれてその西辺となると、いわゆる辺鄙となる。その西彼杵半島・平戸島・天草下島あたりから九州南部にかけて、一連の言語現象がとらえられることは、われ／＼に、この地域の方言脈をとらえしめるものである。このさい、薩隅の地方は、なお一く／＼に見られてよい程度にある。薩隅から右の西辺にかけての地帯を、かりに第一層脈としよう。それに隣る「西北から東南へ」の地帯を第二層脈とする。残る東部が第三層脈である。さきの東西両半は、こゝにこうして三層脈として把握される。

四

〔一〕〔i-〕〔kw-〕の発音は、九州に広く見いだされる。そうして、gの音節は一般に聞かれない。一方、国語史上の鼻母音にかよう鼻母音的な発音は、古来九州にもあつたらしく、今日も、日向の内や九州南部などに、その痕跡、「エンズ」(五十)のよいうな発音が聞かれる。上村孝二氏には、「種子島の鼻母音について」の御発表がある。(音声学協会会報74(75)号)鼻母音的なもの

は、もと／＼、かなり広くにあり得たと思われる。しかし今日、カ行鼻濁音〔ŋ〕は一般に聞かれないうとすると、九州は、昔、鼻母音状態からカ行鼻濁音の発生してよいところに、それを発生せしめないうできたと解されることになろうか。鼻濁音発生以前の状態を今日に引いてきたとも言えよう。〔je〕や〔kwa〕のような前期的状況に深くむすびついたものと思われる。

右のような所であつてみれば、九州南部地方や西辺内〔東条先生「方言と国語教育」国語シリーズ11〕に、ザ行の「ジ」「ズ」とダ行の「ヂ」「ヅ」との発音区別が見られるのも、古風の遺存として、当然とされる。この発音区別が、さきに第一層脈と仮称された地域に存在する。すなわちこの発音区別の事象は、第一層脈をとらえしめる一つの証例となるものである。

九州南部地方内の人々の中でのような、兩種音自覚はそれとして、九州地方には、広く〔dzi〕の発音が聞かれるのではないか。これは中四国にきてもそうか。そうして、土佐に兩種音区別の別して顕著なものがある。

(二) 発音上のことで、つぎに中舌母音関係のことを見ると、これがまた、第一層脈を右のように考えしめるように分布している。薩摩半島南部では、数の「二十・三十」を、「ニ~~ン~~ズ・サ~~ン~~ズ」と発音している。「二十」の「ジュエー」〔u:〕が「ズ」であるところには、〔u〕の発音の単純ではないものがうかゞわれよう。地名「指宿」が「イブスキ」であるのも、こゝに思いあわされる。「シユク」が「スキ」であるのは、「ク」の〔u〕母音が、単純な〔u〕

ではなくて、〔ü〕などの、〔i〕に近よつたものであつたことを思わせはしないか。薩南で、「ゴメンナツシ」(ごめんなさい)の「シ」が、〔i〕のように聞こえた。大隅内でも、「ズーゴエン」(十五円)「ズハチエン」(十八円)のような発音があり、志布志方言でも「ウンダモー アス ドゲン シテナ」(平山輝男氏「国語音調の一性格」國語と國文学二十五年九月)などと言つている。「あし」が「アス」と発音されているのは、「あし」の〔i〕母音が、単純な〔i〕ではなくて、いくぶんとも〔u〕に近いもの、〔i〕のようなものであつたからであらう。大隅東岸でも、「ハル(針)カセー」というようなのを聞いた。「指宿」の「イブ」がまた同例である。南肥後にはいつても、人吉の俚謡の文句に、「あ~~ン~~フト(人)とある。「ヒ」が「フ」となつた地盤には、「ヒ」の〔i〕母音的なものがあつたらう。天草下島に行つても、西岸で、「フトンバ スク」(ふとんをしく)と言ひ、同島南部でも、「ド~~ー~~ズ オスツクダサイマツシエ。」とあつた。

(三) いま一つ発音上のことにふれれば、ラ行音節の実用において、その子音を弱くし、またはおとす傾向が、右の、第一層脈とすべき地帯に、なかんずくいちじるしい。「はおり」は「ハオイ」、「だれ」も「ダイ」である。肥後地方にもこれのさうとうさかんなものがあるが、第一層脈の地域をはなれると、しだいにこれの耳立たなくなつていくのがみられる。したがつて、第一層脈なるものが、この例からもとりあげられることになる。ラ行子音をおとすことのさかんな南九州内に、一方では、「エンクワイ」

(宴会)を「エンクワル」というように、「イ」をかえつて「ル」化したものを見せているのは、また第一層脈の特色になるものである。「シンバイしたり云々」は「シンバル シタイ 云々」と言つてゐる。

五

語法上のことに例を求めよう。いつたいに、九州の尊敬表現法形式のもの分布とは、つぎのような状況が見られる。

〔一〕古来の「お……ある」形式に属するものは、主として薩隅地方〔薩摩・大隅・肥後南部・日向西南部〕に、かつは九州西辺にも、分布している。(小稿「日本語方言状態の東北と西南」國文学攷第十一輯)

〔二〕右の「ある」の転「ヤル」を用いる比較的簡易な尊敬の表現法は、薩隅地方を主地域として、さかんにおこなわれている。

○アツチ イッキヤイ。

あつちへお行き。

○アツチ イタツオツクイヤイ。

あつちへ行つておつて下さい。

などと言う。「ヤル」に「申す」のついた「ヤイモース」、

○アユ ミデミヤイモース。

あれを見てごらんさいな。

のような言いかたもある。

「ヤル」にもとづく「ヤンス」「ヤス」の言いかたも、したがつ

て、薩隅によくおこなわれている。

○先生ノ キヤシタ ド。

○先生ノ キヤンシタ ド。

などと言う。

〔三〕「レル・ラレル」(ルル・ラルル)の尊敬助動詞を用いる待遇表現法がまた、薩隅地方から九州西辺にかけて分布し(小稿「行かレル」『來ラレル』などの「レル・ラレル」敬語について)文学一九五二年十二月)、かつ、原田芳起氏の「熊本方言の研究」によれば、肥後中部以北にも、残存の状態が見られる。その外の地域は、一般には、地ことばとしては、ほとんどこの表現法によつていないようである。

ところで、「せられる」「させられる」に相当する「シヤル・サツシヤル」の変化していつたもの、「行かシタ」(↑行かツシヤツた)の「シ」、その終止形の「ス」、「サツシヤツた」の「サシ」、その終止形の「サス」、また、「来よる」式の進行形に「シヤツた」のついた「来よらツシヤツた」からの「……らシタ」、その終止形の「ラス」の類は、肥筑の地方にさかんにおこなわれている。

○オツチヨ。アゲナ コト ユワース。

おやまあ。あんなことを「言つてらっしやる。」△「言つてらっしやる」ではいけないすぎるという。かるい敬語であるという。▽

は筑後の一例である。豊日方面にはほとんどおこなわれておらず、薩隅地方一般にまたこれを言わない。

九州南部で、「ハル カツシヤイ。」(針をかさない。)のような

言いかたをしているが、これは「貸しヤイ」で、「シャル」の命令形「シヤイ」ではないようである。「本ノ(を)見ツシヤイ。」は言っているが、「見サツシヤイ」は言わない。「タモラツシヤイ。」(「たべさせて下さい。')とともに、同じもの言いとして、「タモラシヤイ。」を言っている。「シヤイ」とはあつても、じつは、上の動詞連用形に、「ヤル」尊敬助動詞の命令形「ヤイ」が複合したもののようなものである。

右のようだとすると、第三層脈とされる地方には、「シャル・サツシャル」からの「ス・サス」「ラス」はなく、これのいちじるしい第二層脈の地方を出はざれると、第一層脈では、これらのみならず、「シャル・サツシャル」の言いかたも見いだされないうことになる。

〔四〕 「ナサル」ことばは、薩隅地方では、平素常用の土地的なものとなつていない。第二層脈と見るべき地方に、「ナサル」の「ナハル」形がさがんにおこなわれている。関連しては「ナハリマツシェ」「ナツシェ」などがある。「ナサイ」に関連する別形「イ・サイ」の命令表現法、

○ユツチヤン キテミサイ。

こつちへきてごらん。

○ソギヤン サイナ。

そんなにしないの！

○ハヨ イカイ。

早くお行き。

のような言いかたも、この内にはできている。これはほかの地方にはまずない。第二層脈の主地帯を出はなれると、九州東北部では、「ンサル」(なさる)などの言いかたがあり、北部では、「ンシヤル」がいちじるしい。

〔五〕 さて、九州東北部内、第三層脈とすべき地方内に、「ンス・サンス」尊敬助動詞の表現法がおこなわれている。

○ヒチヨカンシ。

しておおき。

○何々センスナ。

〔禁止〕

○イッチミサンシ。

行つてお見よ。

などと言う。他の地方には、まだよくこれが見いだせていない。ほとんどおこなわれていないのではないか。

たゞ、大隅内之浦で聞いた、

○ホメックリヨランシター。

ほめてくれよらんシた。

などによると、この地方にも「ンス」などがあるのかとも思う。もつとも、右の一例は一人の老女の発言で、いま一つ、

○イーヤ。ナカンヒタト。

いゝえ。ありませんでした。

のようなものもあつた。土地人七名の相談によると、この地で「行かんセ」「来サンセ」は言わず、「行ツキヤンセ」「来ヤンセ」と言うとのことであつた。右の老女も、「ヤンス」ことばはさかんに用いていた。

以上、「一」から「五」までの事態は、総合して観察すると、つぎのように解釈することができよう。

一つに、「お……ある」形式に属すると見られるものは、その、近古に中央京都語にさかんであつたことからすると、現代方言上、たしかに、古いものゝ残存と言えらる。「お……ある」形式から派生した「ある」の「ヤル」ことばも、ついで古いものと言えらる。これらが、薩隅中心に、偏していちじるしくおこなわれているのである。「オヂヤル」（お……ある）や「ヤル」の地域は、九州で、たしかに一区域の古層脈とされよう。「ヤル」のない地方は、はじめなからかつたのか。他のものが代つて栄えたので、これが衰退したのか。史上、中央語にあつて、今、南九州にこうあるのだから、中間の地方にはなかつたとは思われない。現に日向内などにこれがあり、中国地方にこれが点在する。したがつて、九州での「ヤル」をよく言う地帯は、史的に見て、一定の意味のある地帯とされるのである。九州の、「ヤル」の見えぬ地方では、「ヤル」の地方にはほとんどおこなわれない「ナサル」ことばがさかんである。南九州の「ヤンス」「ヤス」と、肥筑や日向の「ナハル」とは、お……よそ、待遇表現を等しくしていようか。つぎに、「レル・ラレル」敬語法のことをたどると、おもしろい解釈が成り立つ。薩隅本位の、第一層脈とされる地帯には、「レル・ラレル」ことばがある。「レル・ラレル」も古いものである。それが大体そのまゝに存し、かつ、活用形を變形させ、かつは活用形のおこなわれかたに限りを見せている。いかにも衰退・残存という感が深い。それでも、この地方には、「先生がこライ

た。「こラツた」とか、「どこへ行かいたか」とかと、求めればこの種のものが比較的よく見いだされるのに対し、第二層脈とされる地方内の肥後の状態は、前掲原田氏の御研究によれば、一段と残存色を濃くしている。そして、阿蘇郡の、

○アータントコンオトツツァンナモウモドレタカナ。

の「モドレタ」（もどられた）などは、そのまゝ、中国安芸地方の「レル・ラレル」残存状態に酷似している。以上、見るところでは、「レル・ラレル」はもと／＼広くおこなわれたのだが、今は主として、九州南部の、薩隅を主とする地方や、九州西辺の地域におこなわれるのにすぎなくなつたと言ふことができよう。こゝでもし、「レル・ラレル」尊敬表現の方法を採るような気分・傾向が、中央からこの地方へと、あいついでおこつてきた——そこに、なんらかの、中央から地方への影響があつた——と想像することがゆるされるならば、つぎのように言える。

古いことば「レル・ラレル」（レル・ラレル）は、早いころからの流布または流行で、相当に早くから、右の第一層脈とされる地方、九州のはてでも、おこなわれるようになった。「単純に、ものゝ波及と見られるなら、「早くからこの地方へもよくとどいた。」と言へることになる。」

とどいてどうなつたか。「レル・ラレル」のまゝが残存している。「ラルル」が「せ・させ」につく「せラルル・させラルル……」「シャル・サツシャル」ことばはおこしていない。（これがおこなわれていないことを、今、「おこしていない」と言う。）じつは「ナサル」も「なさるル」からだつたとすると、薩隅地方に「ナ

サル」ことばがよくおこなわれていないのは、あたかも、「なす」に「ルル」が複合しなかつたようなものであり、これは「ラル」が「せ・させ」に複合していないのとあい似ている。「ナサル」を言わない所であつて、「ルル・ラルル」を温存している所は、それなりの古脈と言うことができよう。

筑後を中心とし軸とする肥筑の地方は、「シヤル・サツシヤル」にもとづく、「ス・サス」の言いかた、その一種、「ラス」と耳に慣熟してきている言いかたを、今さかんにおこなつてゐる。このことを見れば、当地方は、前地方とちがつて、まず、「せ・させ」と「ラルル」との複合をおこなつたと言へる。「そこはまた、「ナサル」「ナハル」の類もさかんな所である。」複合をおこなつたとすると、これは、おこなわなかつた所とは性質のちがつた地域とすることができよう。この地方にも、「ルル・ラルル」のあつたことは想定される。なければ複合はおこらない。現に肥後などには、中部以北にもある。あつて、「対称には用いないで、他称にだけ用いる傾向がある。」などと原田氏にも説かれていて、正に古来の用法・用語気分をつたえている。こんなことからすると、中国地方の「レル・ラレル」と考えあわせても、「レル・ラレル」ことばは、よく、中央からひろまつてきた——あるいは中央のその影響が浸潤してきた——かと思わせられる。元来、この地方にも、「ルル・ラルル」「ル・ラル」が一般におこなわれていただろう。やがて「せラルル・させラルル」の複合をおこした。複合は後のことだから、この地方は、さきの第一層脈とされる古脈地帯よりも、さらに色を変えていつた所としなくてはならない。しかもこの地

方は、「シヤル・サツシヤル」を言うとともに、このまゝにとゞめておかないで、「行かツシヤッタ」は「行かした」のように、「こサツシヤラン」は「こサツサン」などのように、形を変化せしめていつた。形の推移には多少の時間を見るべきであらう。こうして、この地方の現状は、さきの古脈に比較して、多少とも新しい色あいを呈しているものと見られることになる。

たゞしこれは、このことに関してである。この「ラス」ことばのさかんな地方内にも、「行かイ」「見サイ」のような、軽い敬意の表現法をおこしている。これは、史上、近古時代にもあつたものと見られている。すると、当地方にこれがあることは、その古脈性を、さきの第一層脈の地方の古脈性とあまりちがわぬものとも考えしめるであらう。ものの、土地々々への発生↓自然発生、その変化推移の過程と遅速は、まつたく予断をゆるさない。どこにどのような各個前進があるかもわからない。それにしても、「イ・サイ」の前身の「ナサル」ことばが普通には常用されていないさきの古脈地帯は、たしかに特別に注意してよい性質を持つた古脈地帯としてよからう。

「レル・ラレル」のおこなわれかたと、その、他への複合の有無ということからすれば、第一層脈と第二層脈とは、右のように區別することができ、これに關しては、さらに第三層脈へ解釈をひろげることができる。第三層脈内では、「ンス・サンス」尊敬助動詞がおこなわれている。これがもし、「シヤル・サツシヤル」に「ます」のついたのに等しい「シヤンス・サツシヤンス」から結果された派生形式であるとするならば——そのようなものもあり

得たとすれば、こゝでは、第二層脈ではおこしていない複合を、さらにひきおこしたことになる。「ラス」などは、「シャル」そのものの形の変化推移である。それに対して、「ンス・サンス」は、「シャル・サツシャル」に他の要素が新に複合して、その結果もたらされたのに等しい新産物である。このことからすると、この第三層脈とされる地方は、第二の層脈よりもさらに進んで新事態をおこしたとされよう。「ンス・サンス」に着目するかぎりには、これのある方が、比較的、新色を示すことになつたとされよう。一方では、第三層脈に、「シャル・サツシャル」のまゝの古来の用語もある。それは「ス」などになつていない。そこで、第二層脈で「シャル・サツシャル」から「ス・サス」などをおこしたのと、この第三層脈で「シャンス・サツシャンス」から「ンス・サンス」をおこしたのと、時期の前後などは、なかく言いくいことでもあろう。

しかし、今、「レル・ラレル」を主にとつて、その複合事態を見ていくかぎり、あたかも、九州方言の三分派状態（第一・二・三分派の層脈とすべきもの）には、第一分派に「レル・ラレル」だけ、第二分派に「ス・サス」「ラス」（↑「シャル・サツシャル」系）、第三分派に「ンス・サンス」（↑「シャンス・サツシャンス」系）があつて、こゝに、ものの成立上の前後関係がみとめられることになる。「レル・ラレル」から出発して一元的に見とおし得ることの事態のうえには、右の三大分派を、なんらかの史的、三大分派と解してよい根拠があると考へてよからう。

六

史的三大分派と言つてよいありさまは、他の諸事象をも合わせ考へてみて、みとめることができるように思う。九州と他地方との方言系脈を見ても、そのことを考へやすい状況がくみとられる。

南西九州の中舌母音関係の事象、ならびに鼻母音関係の事象は、山陰地方のそれら関係のものに見あわすことができる。同じく南西地方のザ行音ダ行音の発音区別は、もつと特異な形で、土佐方面に出ている。四国では南半が、中国では山陰が、それぞれ特殊の傾向を示している。この山陰と四国南半とをともうけてそれらに照応する九州南西部は、また特殊の地帯と見やすかるう。

九州南西部（肥後も）でラ行子音のおちることを言つた。これは九州、北・東になくて、中国も山陽になく、山陰にいちじるしい。薩隅地方に対して肥後地方では、文末の助詞、「行かんバイ。」「それさそうタイ。」などの「バイ」「タイ」を用いることがさかんである。こゝではさらに「バイ」と「アンタ」の結合「バンタ」とか、「ノー」と「オマイ」「アンタ」との結合「ノマイ」「ノンタ」とか、異風の文末助詞がよくおこなわれている。それに関連して、「ノンタ」「ノータ」などが山口県下に見いだされる。「行かい」「見さい」などの「サイ」に関連しては、やはり長門地方の「見ーサイ」などが注目される。右のように、九州内でおこなわれかたに対応して、中四国で、いろ／＼の同似現象

が見えている。その同似現象のおこし場所が等しくない。なお他の例をあげれば、大隅の

○オツコオツコ シーチョツド。

あかくともえているよ。

薩摩の

○ソゲン ウゴツ キーヤツト、ヌツカド。

そんなにたくさん着なざると、ぬくいでしょう？

など、「する」「着る」動詞連用形の長音化が見られるが、この種
のことは、「キモノ キーテ」など、四国西南部に見られる。東九州を主とし、南にも西にも見られる。「行つてみて」式の言いかたは、また、四国南半地方に広く見わたされる。これはまた瀬戸内海西部地方、ならびにその中国が沿岸地内にも見いだされる。

以上、九州内方言分派のそれこれに収まるものが、中四国で、そこへこゝへと、いろ／＼ならわかれかたをしている。このさいの中四国の連繫地域もまた偶然のものではないことが知られる。このような、中国四国での反照に対応する九州の分派は、たしかに質の相違を持ったものである。それはおよそ、史的相違を含むものと理解される。

七

中国四国との関係から見かえされる九州内方言分派は、なんらかの史的分派であることが考えられやすい。一方では、中央近畿語の史的漸及を考えしめる生活史的文化的事情も大きいとすれば、例の言語改新波の中央からの波及が、九州を、東から、東北か

ら、西南へとおそつていつたことが想察されよう。史的三分派は、東から西へ、東北から西南へ、新古の別を生じたと見られる。そう見てさしつかえない現状が少くない。第二分派の肥筑本位の地帯が、あるいは両肥・筑後の領域にとゞまり、あるいは肥筑から日向に及ぶこともあるのは、このような、東から西への影響のしかたの流動的なのによることと考える時、首肯しやすいものがある。

新古とその順位の決定は容易でないとしても、ものにより事象によつて、その存在する地方と他との史的相違を示すと見られるものは少くなく、そのような事象のあいよりあいむらがることから、史的相違の分派が、およそ上来の三分派に見られてくるしだいである。それが史的相違の分派であるならば、これは『層脈』と名づけてもよからう。時代相をものがたる遺物遺跡を埋蔵した、地層の名のようにである。層脈に三つの区別があるとするならば、これは史的三段層分派とよんでもよいことかと思う。

X X X X X X

分派とは言うが、現実の九州は、今日もなお一つの九州として、国内でも、かなり特異な生活圏をなしている。『九州性』が顕著である。その九州の性格は、どう説明せられるべきものであろうか。こゝに、分析の第一手段として、生活語としての九州方言を、史的三段層分派として見ることが有効になつてくる。史的三段層は、『生活文化』層の見かたとして、一定の意味を持つものと思われるのである。(昭和二十八年五月十六日)

— 広島大学助教授、文学博士 —